

まるがめこう

## 丸 亀 港 （ 県 管 理 地 方 港 湾 ）

---

丸亀港は中讃地域の中核都市、丸亀市の海の玄関であり、对本州および塩飽諸島を結ぶ海上交通の要衝として重要な位置を占めています。

本港は、中世以前から天然の良港として栄えてきたと伝えられ、江戸時代に入っては広く信仰を集めた金毘羅参詣のための、通称「金毘羅船」の定期航路も開設され、大いに賑わいました。

そのため、丸亀藩により福島湛甫および、新堀湛甫が築造され、また、その石造りの波止には金毘羅信仰の象徴であり、かつ、常夜灯の役目を持った通称「太助灯籠」をはじめとする3基の大灯籠が建てられ、港のシンボルとなっていました。

こうして丸亀港は金毘羅船、北前船等、多くの船舶が出入りする、四国地域の交易、交流の拠点として広く全国に知られるところとなりました。

明治に入っては背後に本県初の鉄道である、讃岐鉄道が開通し、また、四国鉄道等の幹線道路の整備も行われる等、丸亀港は四国の海陸交通結節点としてその重要性を増し、戦前まで数次の改修工事が行われ、また、戦後は急激な工業化の進展と船舶の大型化に対応して、昭和39年から昭和50年にかけて、総面積267haにわたる大規模な臨海工業用地の造成と大型船舶施設の整備が行われてきました。

現在は、大規模震災時の復旧・復興の支援拠点として耐震強化岸壁の整備を進めています。

また、丸亀港周辺には、この埋立地を中心に、造船、金属、化学、繊維、木材等の各種企業が立地し、一大臨海工業地域を形成するとともに、港湾活動も活発に行われ、外貿船の入港も頻繁になり、中讃地域を代表する総合港湾としての発展が期待されています。

